

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成 28 年 6 月 17 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科 医学専攻

職 名・学 年 博士課程2年

氏 名 吉 野 健 史

助 成 の 種 類	平成28年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	第51回ヨーロッパ外科研究学会総会 51st Congress of the European Society for Surgical Reserch		
発 表 題 目	生体肝移植における右葉切除ドナーの術後合併症のリスクに関する検討		
開 催 場 所	チェコ共和国 プラハ コリンシアホテル		
渡 航 期 間	平成 28 年 5 月 24 日 ~ 平成 28 年 5 月 30 日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	350,000 円	
	使用した助成金額	350,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助 成 金 の 使 途 内 訳	航空券	110,000 円
		日本国内での交通費	6,700 円
		チェコ国内での交通費	12,000円
		学会参加費	80,000 円
滞在費		116,300 円	
	発表資料作成費	25,000 円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回、本助成に初めて応募しましたが、国内や現地での交通費等の領収書など、残していくものの提出がなく、手間が少ないのが非常に助かりました。また、渡航費や滞在費が高くつくヨーロッパでも十分に賄えるだけの助成をいただけたのも有り難かったです。		

成果の概要

吉野 健史

今回、チェコ共和国の首都プラハのコリンシアホテルで行われた、第 51 回 ヨーロッパ外科研究学会総会(英文)51st Congress of the European Society for Surgical Reserch に参加し、4 日間に渡る、様々な外科手技、研究分野での最先端の発表を聞くことができた。

分野は多岐に渡り、私が専門とする肝臓分野や肝移植分野だけでなく、一般外科、腹部外科や泌尿器科、肺移植などの分野で、しかも基礎研究発表だけでなく、臨床的な手技の発表や、臨床研究発表など、自分が専門とせず、普段あまり馴染みのない分野の発表を聞くことで、今後の自分の研究、臨床のためのいい勉強になったし、刺激にもなった。

聴講した中でも、特に興味深かったのは、最近肝切除において本邦でも話題になっている(門脈塞栓術の代わりに実質切離と門脈結紮を 1 期、次に摘出を行う 2 期的手術を行う)ALPPS 手術におけるマウス実験の発表である。ヒトと違い、マウスなどの小動物は、肝臓が初めから分葉になっているため、ALPPS モデルには向かないとされていたが、それに対し、分葉ごとに切除して ligation を行うなど、様々な角度からその問題点を克服するための研究についての発表で、内容はまだ論文化もされていないもので新規性もあり、また日本ではなかなか積極的に行われているとはいえない分野でもあり、これは海外学会に参加しないとなかなか聞くことができない内容であった。1 例ではあるが、現在海外でまだ論文化されていない研究でも、このように興味深い内容の発表をたくさん聞いたことは、いい勉強になった。

また、今回私自身は Analysis of risk factors for posthepatectomy complications in right lobe living donors for liver transplantation [和文] 生体肝移植における右葉切除ドナーの術後合併症のリスクに関する検討、について発表を行ってきた。私にとって海外学会の参加が初めてであったので、参加までの準備も国内の学会発表とは多少勝手も違い、さらに外国人相手に英語のプレゼンテーション、質疑応答を行えたことは、日本で体験するのは不可能であり、非常に良い経験になったし、英語でのコミュニケーションについては更なるスキルアップが必要と痛感させられた。

海外では脳死移植を多く行っている国が多いが、日本では制度の違いもあり、生体肝移植を多く行っているという現実がある。その中でも生体肝移植において本邦随一の症例数の手術を行ってきた当科の生体肝移植ドナーの結果をもって、右葉ドナーの安全性を示したことは世界的にみても非常に意義深かったと考える。実際、その右葉ドナーの安全性となった根拠、結果検討については多くの質問が出され、それを回答することで理解を得られたと考えている。質疑応答で得られた内容も加え、早急に論文化し発表したいと考えている。

学会のアカデミックプログラムだけでなく、全体懇親会などにも参加し、いろいろな研究者と忌憚のない意見交換ができたことも良かった。学会会場での質問と違い、研究の中での実際の苦労話や失敗話、注意点なども聞け、また私の発表内容についても、肝脂肪化の指標(L/S比)などを加えると、さらに興味深い内容になるなどの、今後の研究、論文化する際の非常に有効な意見も聞くことができた。

実際に体験出来たことの詳細はここに書き切れないが、このような海外での学会参加は費用面での問題も大きく、どうしても参加するのに躊躇してしまいがちである。しかし、今回本助成をいただけたことで経済的負担を軽減でき、学会に参加できたことは、非常にいい勉強、経験になっただけでなく、今後の海外を含めた学会発表に向けてのステップになったと考えている。また、これらの経験は次回以降の学会参加の意欲にも繋がるし、ひいてはその発表をするための研究に対する意欲の向上にも大きなプラスとなっていると考える。これをいい刺激にして今後の研究、発表に大いに役立てたいと思う。

文末ではあるが、助成を行って頂いた、公益財団法人 京都大学教育研究振興財団、その関係者に感謝の意を述べるとともに、今後さらなる良い研究を行えるように最大限努力することで成果の発表としたい。